

NEWSLETTER #141

日本ポピュラー音楽学会

vol. 37 no. 2 July 2025

p.1 第 37 回 JASPM 年次大会の開催と発表募集について

p.2 2025 年度第 1 回例会 ケヴィン・フェレス氏講演会加藤夢生

p.4 2025 年度第 2 回例会 卒論・修論発表会報告星川彩・加藤夢生・加藤賢

Information

p.8 事務局より

第 37 回 JASPM 年次大会の開催と
発表募集について

【ご挨拶】

大会実行委員長 吉光正絵

2025 年の JASPM 全国大会は、12 月 6 日（土）および 12 月 7 日（日）に、長崎県立大学シーボルト校にて開催されます。第 37 回を迎える本大会は全日程対面開催とし、1 日目（12 月 6 日）午後に個人発表～総会～懇親会、2 日目（12 月 7 日）午前にワークショップ、午後にシンポジウムを予定しています。長崎県立大学シーボルト校は、長崎市の郊外、大村湾を望む自然豊かな丘陵地に位置する、開かれた公立大学です。地域と連携した教育・研究にも力を入れています。キャンパスへは、JR 長崎駅からバスで約 25 分とアクセスも良好です。宿泊先は、JR 長崎駅周辺および路面電車の電停から徒歩圏内が便利です。長崎は異文化交流の歴史を背景に、独自の多様な音楽文化が

育まれてきた地域でもあります。今年度大会では、こうした特性を活かしながら、活発な議論が展開されることを期待しています。多くの皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

【発表募集】

研究活動理事 増田聡・大寫徹

本年度の大会での個人発表（12月6日（土））、ワークショップ（12月7日（日））の募集をいたします。発表申込書（個人発表用とワークショップ用のそれぞれのワードファイルがあります）をダウンロードし、必要事項を記載して、下記メールアドレスまで添付ファイルにて送信してください。受付の締め切り（8月31日（日））後に研究活動委員会が申込内容を吟味したうえで、発表についてのお知らせを個別に連絡いたします。

■ 申込書類

- ・個人発表用申込書 Jasp37in[].docx
- ・ワークショップ用申込書 Jasp37ws[].docx

上記のリンクから申込書をダウンロードし、必要事項を記載してください。

■発表時間（予定）について

- ・ 個人発表： 30分（発表20分＋質疑応答10分）
- ・ ワークショップ： 3時間

■ワークショップ企画案について

ワークショップでは、一つのテーマをめぐって多角的に提起される問題について、フロアとパネルの間に時間をかけて議論することができます。ご自分の研究フィールドの意義を知らしめる絶好の機会ですので、奮ってお申込ください。

パネルは通常、3名ほどの発表者（問題提起者）と1名の討論者から構成されます。申込時に全員の名前を記載することを原則とします。申込時に討論者についてやむを得ず未定であるという場合は、申込採択となれば、人選について研究活動委員会より相談させていただきます。なお非会員も問題提起者や討論者になることができますが、謝礼や交通費は支払われません。

■申込締切

個人発表・ワークショップとも2025年8月31日（日）（厳守）

※個人発表・ワークショップともに申込書のファイル名のカッコ内に氏名を記入して提出ください。

例：Jaspm37in[江戸椎欄].docx

Jaspm37ws[美里居あいり].docx

※研究活動委員会より受領の連絡をいたします。

※現在非会員の方は、入会申込をされたのちに発表申込をしてください。入会申込はリンクを参照してください。

https://www.jaspm.jp/?page_id=90

■大会での個人発表、ワークショップのニューズレターへの報告に関して

大会での個人発表、ワークショップは、翌年3月発行予定のニューズレターに報告を書いていた必要があります。発表の申込をなさる方はご承知おきください。

・ 締切：2026年2月15日（日）

・ 分量：個人発表報告 1200字程度

ワークショップ報告 3200字程度

・ 原稿の提出先：学会ニューズレター担当（研活）

(jaspmkk@gmail.com)

・ 報告内容：

②

個人発表は、発表者自身が、発表の内容と質疑についてまとめてください。

② ワークショップは、問題提起者や討論者以外で報告者を決めて、内容と質疑についてまとめるよう代表者が報告者に依頼してください。発表当日（12月7日（日））までに報告者を決め、お名前と連絡先を、学会研究活動担当

(jaspmkk@gmail.com) までお知らせ下さい。

■個人発表・ワークショップ申込書送付先・問い合わせ先

研究活動委員会 増田聡・大寫徹

メールアドレス jaspmkk@gmail.com

**2025 年度第 1 回例会
卒論・修論発表会報告
加藤夢生**

本例会ではコロンビア大学音楽学部准教授、ケヴィン・フェレス氏による特別講演が行われた。講演は「Hiroshima: Song of the Sansei(ヒロシマ:サンセイ/三世の歌)」と題され、日系米国人フュージョン・バンド、ヒロシマのジャズ史への位置づけが検証された。

ヒロシマは日系米国人 3 世のメンバーにより 1974 年に米国ロサンゼルスで結成された。和楽器や日本的モチーフを取り入れたセルフオリエンタリズム的なサウンドは、同時期のフュージョン・バンドの中でも特にユニークなものとして知られている。しかし、商業的には成功したものの、ヒロシマは米国内のジャズ評論家や研究者から正当な評価を受けてこなかった。一方で、非公式的場面において多くの評論家がこのバンドを高く評価していることが分かっている。こうした背景を踏まえ、フェレス

氏はヒロシマの歴史的な重要性を、彼らが音楽活動を通じて行った、アジア系/日系米国人としてのアイデンティティー表出による米国内の人種の力学への介入という点から検証した。発表では社会背景、関係者の証言、及び、視聴覚素材(音楽、ミュージック・ビデオ、アルバム・アートワーク)の分析を通じ、多岐にわたる観点が示された。以下では紙幅の都合上、要点のみを記す。なお、質疑応答についての報告は割愛する。

フェレス氏はまず、ヒロシマ受容の背景として、米国内でのアジア系米国人ジャズ音楽家の社会的立場について説明した。ジャズはアフリカ系米国人のみならずクレオールによる文化的抵抗やアイデンティティーの表現手段として発展してきた。しかし、米社会に強固に残る「黒/白」の二元的人種枠組みはアジア系音楽家を不可視化してきた。また、アジア系米国人に対する「永遠の外国人」というステレオタイプは、彼らを米国文化の正統な担い手として認識させることを妨げてきた。一方で、アジア系米国人は「モデル・マイノリティ」として社会的成功が語られることがあるが、この概念は他のマイノリティ集団との比較で用いられることによって人種間の分断を醸成してきた。同様の描写は1960年代のジャズ言説にも見られ、日系米国人の成功は時にアフリカ系米国人の苦闘と対比されてきた。ヒロシマに対する評価はこのような歴史的背景に根差している。

続いてフェレス氏は、ヒロシマが以上のような既存の社会的枠組みに対して音楽を通じて行った交渉を複数の観点から分析した。フェレス氏はまず、ヒロシマの音楽の文化的混交性を改めて強調した。例えば、デビュー・アルバム『Hiroshima』(1979) はリズムや和声の面でアフリカ系米国人音楽の強い影響を受け一方で、旋律や楽器編成等には日本的要素を積極的に取り入れている。さらに日本的要素は、箏の使用法に顕著であるように、単なる装飾ではなくしばしば核心的な役割を担っている。ヒロシマは日本の音楽的要素を米国の大衆音楽と接続することで、日系米国人としての音楽的アイデンティティーを構築している。

続いてフェレス氏は、ヒロシマが日系米国人としての他の人種集団に対して取った立ち位置に分析の焦点を移した。アルバム『Between Black and White』(2003)のタイトルは彼らの人種的位置づけを象徴している。つまり、ヒロシマにとって日系/アジア系とは「黒」でも「白」でもない「あいだ」である。こうしたアイデンティティーを

音楽的に追及する上で、他のマイノリティ、特にブラック・コミュニティと如何なる関係性を構築したかが次の焦点となる。これについてフェレス氏は、バンド・リーダー、ダン・クラモトの発言から、文化的混交性というアイディアがアース・ウィンド・アンド・ファイアー等のアフリカ系米国人の音楽に由来するものであったことを確認する。このようにヒロシマにとってブラック・コミュニティは敵対するものではなく連帯するものであった。ハーワード大学のようなアフリカ系米国人の聴衆が多い会場での公演(1979年)や黒人ミュージシャンとの積極的な共演はこれを例証する。

さらにフェレス氏は、視覚表現からもヒロシマの日系米国人としてのアイデンティティーの模索が読み取れることを示した。例えば『San Say』(1983)のミュージック・ビデオにおける日本の武道やストリートカルチャーの交錯は、日系米国人の若者が直面する文化的アイデンティティーの複雑さを反映している。また、アルバム『East』(1989)、『L.A.』(1994)、そして、『The Bridge』(2003)のカバー・アートにおける日米の都市風景は彼らが生まれ育った環境の心象風景である。そのような環境で日米の伝統文化と現代文化の両方に接してきた彼らの音楽は多文化的感性を全面に押し出している。

結論としてフェレス氏は、このバンドが日本の伝統音楽、米国の大衆音楽、アフリカ系米国人の音楽文化を独自の方法で横断的に融合させることで、異なるコミュニティ間の対話を促進する役割を果たしてきたと主張した。ヒロシマの商業的成功とその人気は米国社会における二元的人種理解に異議を唱えると同時に、より包摂的な米国音楽のあり方を提示している。さらに、日米の音楽要素の統合や他のマイノリティ集団との共演は、異文化間の交流可能性だけではなく「日系米国人」という範疇の複雑性を示唆している。

これまで周縁化されてきた日系音楽家の米国ジャズ史への積極的な貢献を多面的に提示するフェレス氏の研究は、完全な形で発表された暁には、ジャズ研究に多大なインパクトを与えるだろう。ジャズ研究はこれまで、一枚岩的な「米国」固有の文化としてジャズという見方を脱し、他地域に目を向けることでその音楽文化の混交性・複雑性・流動性を明らかにしてきた。このような更新されたジャズ理解には様々な形容詞が動員されてきた。「グローバルな global」、「国際的な international」、「多国籍な transnational」等がその

例である。これらは「地球規模の視点」(Negus & Shin 2021)の導入として理解することが出来る。その中で近年では「ディアスポラの diasporic」経路 (Johnson 2019)や「人種間の interracial」交流 (Roberts 2016)に光をあてることで大文字のジャズ史において周縁化されてきた者たちの声を拾い上げる研究が現れ始めている。こうした潮流の中でフェレス氏の本研究は、ヒロシマの再評価を通じて日系音楽家の活動を米国ジャズ史に正統なものとして位置づけ直すことで、従来のジャズ研究がその外側から相対化してきた『米国音楽』としての「ジャズ」史をその内部から書き換える意欲的な試みである。

本研究が米国のジャズ史を内側から更新するならば、米国を主な参照項としてきた日本のジャズ史もまた、再考を求められるだろう。日本ジャズ史研究は長らく、米国の文化的影響下において日本人音楽家がこの外来音楽をどのように受容してきたかを考察してきた。日本人音楽家による「真正化の戦略」に焦点を当てたアトキンスの研究 (Atkins 2001) 以来、研究者たちは米国の影響範囲やその経路、及び、日本国内におけるその受容・発展過程を明らかにしてきた (東谷 2005; モラスキー 2005, 2010; 細川 2007; 大寫 2014)。一方で、近年では澤田による沖縄のフィリピン人音楽家に関する研究 (2021) や忠による環太平洋圏の大衆音楽文化史研究 (2018-2023) に見られるように、「地球規模の視点」の下、日米二国間よりも複数国間のダイナミズムに対する関心が高まる中で、米国は相対的に後景化しているように思える。ビュスカートによる日本のジャズに関する最も新しいまとまった研究 (Buscatto 2024) でも、アトキンス的な「真正化」よりも、よりコスモポリタンな視点から「自己表現」としての実践に焦点が当てられている。こうした研究が日本のジャズ—あるいは大衆音楽一般—の歴史記述における米国の脱中心化を図る動機は十分理解できる。しかし、フェレス氏の講演は、これまで問題視されてきた「米国」とはそもそも何か、改めて問い直す契機となるだろう。その上で日本のジャズ史を—そして、この「日本のジャズ史」いう言葉によって私たちが枠付けようとしてきたものとは何かについて—米国との関係の下で再考するならば、新たな視座が開けるはずである。

(加藤夢生)

2025 年度第 2 回例会

卒論・修論発表会報告

星川彩・加藤夢生・加藤 賢

山田陽菜(京都精華大学メディア表現学部音楽表現専攻)「SNS によって生じる『関係労働』から、地下アイドルの労働環境の問題点と解決策を考える」

地下アイドルの労働環境を批判的に考察するために、SNS における地下アイドルの活動に焦点を当てた研究である。発表冒頭では、地下アイドルによる SNS 投稿が活動の一環として広まるなかで労働とプライバシーの境界が曖昧になり、メディア環境における労働の実態が不可視化されているという課題が示された。この課題から「地下アイドルの労働環境に関する問題点」「地下アイドルの SNS をめぐる利用実態」「地下アイドルの SNS 活動における関係労働」の三点がリサーチクエストンとして提示され、ナンシー・K・ベイムの「関係労働」概念を理論的枠組みとして、地下アイドルの SNS 活動を労働として捉えることの重要性が強調された。司会者にとって最も興味深かったのは、今日まで蓄積されてきたアイドル研究の領域に「送り手側の視点」を積極的に導入しようとする発表者の姿勢である。質疑応答では、発表中盤で提示された「地下アイドルの選出基準」についての批判的検討や、本研究がアイドルの労働環境を論じた先行研究といかに交差しうるかについて議論が交わされた。アイドルをめぐる議論は、上岡磨奈『アイドル・コード——託されるイメージを問う』(青土社, 2023 年)や田中東子『オタク文化とフェミニズム』(青土社, 2024 年)をはじめとして近年盛り上がりを見せているため、今後の議論のさらなる発展が期待できよう。

弓掛遼太郎(武蔵大学社会学部)

「労働は音楽の聴き方を左右するか ——リスク社会における労働と消費文化——」

今日の労働と文化消費の関係性に焦点を当て、余暇時間をめぐる「余裕」の喪失を音楽聴取という側面から議論した研究である。三宅香帆『なぜ働いていると本が

読めなくなるのか』(集英社, 2024 年)の議論を出発点とし、自己実現と労働の関係性が強化され、文化消費が効率・有用性を重視する傾向にあることを批判的に分析している。とりわけ音楽消費をめぐる状況を検討した発表後半部において、スコット・ラッシュ(2002=2006)や南田(2014)の議論を援用しながら、美学的判断・反省的判断を伴う「鑑賞」と「遊び(プレイ)」として経験される楽しみ方を「働きながらできる/できない文化消費」として検討する箇所は興味深かった。正規・非正規雇用をめぐる格差、長期雇用慣行の変容、就職活動の早期化・長期化が若年層の文化的主体形成に与える影響に言及しつつ、近年の「推し」文化も労働・余暇の文脈から分析可能であることを示唆した点には、本研究の他分野横断的な可能性が多分に含まれていたように思う。今後の理論的・実証的展開が期待される。

(星川彩)

中尾莞爾(横浜市立大学国際教養学部)

「音楽サブスク主流の聴取環境における新たな差異の体系の検討」

本発表では、定額制音楽配信サービス(音楽サブスク)による聴取が主流となりつつある若者の音楽聴取の現代的な在り方をアンケート調査に基づいて検討された。発表者はブルデューの議論を批判的にうけ、「何を聴くか(What)」ではなく「どう聴くか(How)」に焦点を当てた上で、音楽聴取における卓越化の新たな体系を明らかにしようとした。発表者によれば音楽サブスクの普及は従来の文化資本論が依拠していた金銭的・時空間的制約を希薄化するとともに、音楽ジャンルの差異を曖昧化した。そうした背景から、発表者は、聴取態度そのものが卓越化の基準になっているという仮説を立てた上で、①聴取におけるコミットメントの強度、②聴取における寛容性、③音楽趣味の自己評価という 3 つの指標を設定し、アンケート調査を行った。ここから発表者は音楽サブスクのメインユーザーである若者において、音楽ジャンル以外にも多様な差異の体系が存在することを主張した。

この発表に対し、フロアからは、具体的な「場」における卓越化の過程の分析可能性や、被調査者の自己評価に関する考察の必要性などが指摘された。現代の技術環境の変容を文化社会学の代表的理論に結び付け

る本研究は、ポピュラー音楽研究の射程を越える発展可能性を持つものであり、調査手法の更なる精緻化が待たれる。

信田知成(立教大学社会学部メディア社会学科)

「融解する VOCALOID のキャラクター性 ―「メルトショック」による初音ミクのキャラクター性の変遷について―」

本研究では、初音ミク現象の初期に初音ミクのキャラクター性に対する意識に影響を与えたとされる「メルトショック」の分析を通じ、初音ミクのキャラクター性の変遷プロセスを明らかにすることが目指された。発表者によれば、「メルトショック」はキャラクターソング中心であったそれまでのボカロシーンを転換し、その後のシーンの流れを決定づけた出来事として語られることが多いという。シーンの転換を「メルトショック」に起因する突発的・偶発的な現象であるかのように捉える通説的理解に対して、発表者は言説分析と量的調査によって次の三点を示した:①以上のようなボカロシーンの変遷が段階的であったこと、②初音ミクが多層的なキャラクター性を持っていたこと、③《メルト》以降、初音ミクのキャラクター性が背景化していったこと。発表者は、これらの知見は《メルト》のみならず、より多様な文脈からの影響によりボカロシーンが転換したことを示すものであると同時に、初音ミクのキャラクター性の変遷プロセスに一定の説明を与えるものであると主張した。

質疑応答では、ロックやボカロ以前の DTM などに関する議論との接続可能性や、「メルトショック」当時の状況についてのコメントが寄せられた。本研究は、シーンの転換点と見なされてきた事象に詳細な分析を与えた点で意義深いですが、今後、この知見がボカロ文化全体や隣接する他の音楽文化の理解にどのような貢献を果たしうるか、発表者の研究の更なる進展が期待される。

清水将也(東京大学大学院学際情報学府博士前期課程)

「『丸サ進行』の時代ーポピュラー音楽のマルチモダリティ分析ー」

本研究は、2020 年代に流行した「丸サ進行」と呼ばれるコード進行がその流行前後において各時代のヒット曲

の表現に与えてきた影響を具体的に明らかにすることを試みた。発表者は過去のヒット曲の量的調査から丸サ進行流行の実態とともに、それらの歌詞において「夜」という語が頻出することを示した。この上で丸サ進行を用いた楽曲が顕著にみられた時期を3つに区分した上で、それぞれの時期における「夜」の表現を各代表曲の和声的要素、歌唱法、映像の分析から次のように特徴づけた。①2010年代後半(椎名林檎《長く短い祭》):きらびやかで都会的な夜の物語、②2010年代後半(あいみょん《愛を伝えたいだとか》):繰り返される夜の情景、③2020年代(ずっと真夜中でいいのに。《秒針を噛む》):停滞的なイメージとしての夜。丸サ進行が「夜」の意味内容の変化に影響を与えたことを示す、以上の検証を通じ、発表者は「丸サ進行」の流行は、「歌は世につれ」ならぬ「世は歌につれ」、すなわち、コード進行を起点に私たちの認識が形成されていくという現象の一つであると結論づけた。

質疑応答では、本研究は従来の国内のポピュラー音楽研究において十分に注意が払われてこなかった和声に光を当てた点で新鮮であり、ポピュラー音楽の実践者にとつての和声の意義を改めて検討する必要性があるとの指摘があった。本研究は量的・質的手法を組み合わせることで一貫性のあるストーリーを提示する点では意欲的な試みであると評価できる。音楽研究として更なる充実を図るならば、音楽理論史や音楽解釈学の知見を踏まえた、より精緻な理論的裏付けが求められるだろう。

(加藤夢生)

修士論文「国文学研究のディシプリンにおけるポピュラー音楽検討の一例」

手塚透徹(立命館大学文学部)

手塚氏の発表は、シンガーソングライター・キタニタツヤの諸作品を、歌詞・MV・SE・グッズ・舞台演出まで含めた「総合テキスト」として扱い、国文学的文献学の観点から再読した意欲的なものである。まず楽曲「包まれた街」の歌詞中に出現する〈観想〉を、西洋哲学語である「テオーリア」と仏教修行語「観想」との二重翻訳として位置づけて説明した。続いて「クラブ・アンリアリティ」の歌詞に出現する〈夢〉を『梁塵秘抄』夢中見仏譚と重ね、阿弥陀往生の時間性と「一時的夢世界」を軸に楽曲主

題を再定位した。質疑では、国文学と音楽学を架橋する挑戦的な試みを評価する一方で、題材の選択や用語の使い方の恣意性が強いこと、「なぜそう読まれるのか(読み解く必要があるのか)」という根拠に乏しい印象を与えてしまうこと、そのような研究手法は国文学という領域においては許容されるのかという点について議論がなされた。全体として、テキストの自由な読解と、そこからの解釈の広がり、発表者の知的関心と冒険心の広さを示すものであったと言える。

なお本発表が口頭のみで行われ、オーディエンスに対する資料が一切用意されなかった点について、司会および研究活動委員の立場から指摘を行った。自身の発表を他者に聴講させる以上、そこにはスライド資料やテキストベースの要約資料、あるいはせめて論文本文が用意されるべきであり、まして本発表のように発表者自身が「学術的実践」と述べている内容であれば尚更である。それはポピュラー音楽研究であれ国文学であれ変わらない、自らの発表を聞いてくれた学術共同体に対するリスペクトの姿勢であるはずだ。もっとも手塚氏の発表は卒業論文であるため、それを個人の責に帰すことは避けたい。学生の努力が、内容と関係のないところで損なわれることのないよう、指導教員は発表形式について最低限の指導を行うべきではないだろうか。

修士論文「ブラジルポピュラー音楽史の政治性——〈友愛の音楽〉ショーロの〈正史〉に映るナショナリズムの影」

鈴木岳志(東京外国語大学大学院)

鈴木氏の発表は、ブラジルの国民的音楽とされるショーロにまつわる「真正性」言説の成立と、その語りの背景にある政治性を、言説分析を通じて明らかにしようとするものである。なかでも、複数の演奏者が輪になって即興的に演奏を交わす「ホーダ・ヂ・ショーロ(Roda de Choro)」という実践が、「本当のショーロ」を継承する空間であるとする通説的言説に注目し、それを〈ホーダ史観〉と名付け、その構築過程と制度化のメカニズムを批判的に捉え直すことを中心的な目的としている。

発表者はまず「ホーダ・ヂ・ショーロこそが真正なショーロを受け継ぐ空間である」とする歴史叙述が、いかに構築されてきたかを問う。具体的には、1990年代以前のジャーナリストであるチニョラオン、ヴァスコンセロスの

著作と、1990年代以降に登場する音楽家カゼスの著作を比較し、ショーロに関する語りがジャーナリズムから演奏家自身へと移行したことにより、「民衆的で非政治的な音楽」としてのショーロ像が強化されていったことを丁寧に論証した。ここで提示された〈ホーダ史観〉とは、ホーダ・ヂ・ショーロという空間が象徴するとされる「友愛」や「非政治性」のイメージによって、実際には男性・中産階層が中心となる演奏実践の政治的・社会的バイアスが不可視化される構造を指す。発表者は、こうした構造が教育機関、出版物、さらには学術研究を媒介することで制度化され、結果としてブラジル国家の文化政策や観光振興に奉仕する言説装置として働いてきたことを批判的に整理した。加えて、「歴史の語り手の交替」が生み出すポジショナリティの変化に着目し、語る主体の変化がいかにショーロの「正統な過去像」を再編成していったのかを丁寧に追跡した点は、音楽研究における言説分析の応用として高く評価される。

質疑では、「実践の多様性に対して『ホーダ史観』がいかに排他的に機能しているのか」といった、歴史叙述と制度の関係性に関する問いが寄せられた。ショーロという伝統音楽に対して、音楽実践そのものではなく、それが語られる構造に注目した点、そして言説分析を通じて「非政治的」とされてきたジャンルに潜む政治性を照らし出した点において、本研究はラテンアメリカ音楽研究の今後の展開に一石を投じるものである。ブラジル音楽のギタリストとして日々研鑽を重ねつつ、歴史的・社会的な視座を保ち続ける発表者の、さらなる成長が待ち遠しい。

修士論文『『ミュージック・ライフ』における〈ヘヴィメタル観〉の形成』

永田幹人（早稲田大学大学院）

永田氏の発表は、1980年前後の日本において〈ヘヴィメタル〉という音楽ジャンル名がいかにして定着し、その意味づけがどのように構築されていったのかを、音楽雑誌『ミュージック・ライフ』の誌面分析を通じて明らかにしようとするものであった。とりわけ1978年から1983年の誌面を対象に、ジャンル名としての〈ヘヴィメタル〉がどのようなプロセスでハードロックと切り分けられ、あるいは再統合されていったかについて、語用論的な視点から三段階の変遷モデルを提示した。第1段階（1979年）

では、宇都宮カズによるジューダス・ブリストの記事において、〈ヘヴィメタル〉という語が初めてジャンル名称として誌面に登場した。第2段階（1980年以降）では、後に『BURRN!』の編集顧問を務めることになる伊藤政則らが、イギリス現地の音楽誌の用法を下敷きとしつつ、ハードロックの歴史を〈ヘヴィメタル〉として語り直す記事が誌面に広がっていった。だがその過程では、用語の範囲や定義が記者ごとに食い違い、言説上の混乱が生じる。第3段階（1982年以降）になると、「ハードロック＝ヘヴィメタルの前身」とする系譜的な理解が誌面上で優勢となり、日本独自の広義の〈ヘヴィメタル〉枠組みが形成されるに至った。

発表者は、これらのジャンル用語の揺れが、雑誌メディアの二重の性格——すなわち、レコード会社にとっての宣伝装置でありながら、読者からの信頼も維持しなければならないメディアとしての矛盾——に由来するものであると論じた。さらに誌面における写真配置やレイアウトにおいて「男性的な洋楽イメージ」が強調されていた点に着目し、それが後年のヴィジュアル系ロック受容を準備した可能性にも言及するとともに、視覚文化の観点から、雑誌メディアのジャンル構築における役割を補足的に論じた。質疑応答では、「読者層はこのジャンルの揺れをどう受け止めていたのか」といった点が問われ、発表者は、誌面の読者欄や特集の構成を今後さらに精査していく意向を示した。

本発表は、発表者自身による丹念な誌面読解と、ジャンルをめぐる言説の変遷に対する鋭敏な関心が貫かれた質的メディア分析の好例である。また1980年代ヘヴィメタルブームを同時代的に経験していない若手研究者が、この時代の雑誌言説を精読し、継承していく意義も大きいだろう。今後は研究をより発展させるべく、海外誌との比較や、同時期に活動していた国内バンドの誌面上での扱いとの対照分析、あるいはライター間の役割分担や言説の編集方針といった編集構造そのものへの踏み込みといったさらなるアプローチが望まれる。ジャンルの境界がどのように調整され、あるいは曖昧に保たれてきたのか。その言説構造をさらに横断的に明らかにしていくことは、メディア文化研究における一つの方法的礎となるはずである。

修士論文「現代における選曲実践の分析——〈語られる選曲〉とミュージッキング再考」

松本迪大（立教大学大学院）

松本氏の発表は、音楽サブスクリプションサービスの普及によって選択肢が急激に増加した現代において、「何を聴くか」を自ら選ぶことがリスナーにとって不可欠かつ重要な実践となっている点に着目し、音楽聴取に先立つ「選曲」行為そのものを独立した音楽実践として理論化するものであった。なかでも、本発表が提起する「語られる選曲」という概念は、単なるプレイリストの共有にとどまらず、リスナーが自身の音楽遍歴や感情を語ることによって、選曲に意味づけを与えようとする語りの実践を指す。

第1章では、蓄音機からストリーミングサービスに至るまでの音楽聴取の歴史を「選曲」の視点から捉え直し、受動的聴取から能動的選択へと向かう構造変化を描き出した。第2章では選曲を単なる情報提示ではなく、厚みのある語りとして展開しうること論じた。第3章では、音楽雑誌のレビューや SNS 投稿などの文字メディアを対象に、語られた選曲がどのように他者の聴取フレームを組織しているかを分析した。第4章では、ポッドキャストにおける語りの実践に焦点を当て、非同期的かつ非対面的な音声空間において、「居合わせなさ」にもかかわらず共感的共同性が生まれている過程を描いた。続く第5章では、実際にポッドキャストを通じて選曲を行う複数のリスナーの「語り」における選曲の意義や、聴者が自身の好みや経験を通じて文脈を再接続する動機を丁寧に掘り下げた。最後に結論として、「語られる選曲」は、アルゴリズムによる即時的なレコメンドとは異なり、「遅い聴取」の回路を可能にするものであることが示された。すなわち、リスナーが自らの語りを通して、選曲の意味を自己の時間軸に引き寄せ、他者に向けて提示することで、聴取体験に厚みと奥行きをもたらすプロセスが確認された。

質疑応答では、「語り」という語用的枠組みを用いて音楽選曲を理論化した点、また文字／音声というメディア差を横断して分析を展開した点に高い評価が寄せられた。「選曲」という題材は、ことポピュラー音楽研究においては美学的・文化実践的観点から繰り返し研究の題材とされてきたものである。そのような領域に挑み、数多くの先行研究の読解と接合を通して新たな視点を示そうとした発表者の姿勢は学術的誠実さを示すものであり、十分に評価されるべきものである。ただし司会者と

しては、数多くの資料を読み解いていく過程で、松本氏の中に生まれたであろうオリジナルな知見や発見が、「先行文献に現れる固有名詞や用語をくまなく使おう」とする慎重さによって見えづらくなってしまっている印象も受けた。すでに素晴らしい気づきがたくさんあるはずなので、今回の発表では他者からの借り物の言葉をもう少し削減し、ぜひ松本氏自身の言葉をもって、より明快な議論が展開されることを期待したい。それは本研究を、さらなる高みへ押し上げていくはずだ。

（加藤賢）

◆information◆

事務局より

1. 登録情報に変更が生じた場合について

所属・住所・メールアドレスなどの登録情報に変更が生じた場合、できるだけ早く SMOOSY（会員マイページ）にログインし、ご自身で修正作業を行ってください。変更がない場合、学会誌や郵便物、メールニュース、例会のお知らせがお手元に届かないなどのご迷惑をおかけするおそれがございます。修正項目の入力の際には、入力内容にお間違えがないようご注意ください。

2. 退会の届け出について

本会の退会を希望される場合、速やかに学会事務局 (jaspm.jimukyoku@gmail.com) までお知らせください。

3. 会費請求と学会誌について

2024年4月に、学会誌 Vol.27 (2023) を会員の皆様のお手元にお届けしました。

なお、学会誌は前年（2023年）度の会費納入者にお送りしています。会費納入をしたに関わらず、学会誌が届かない場合には、入れ違いや何らかの手違いが発生している可能性がございますので、お手数ですが事務局までご一報ください。

4. ニュースレターについて

本紙のバックナンバーについては JASPM ウェブサイトの
のニューズレターのページに掲載されています (URL :
https://www.jaspm.jp/?page_id=213)。

JASPM NEWSLETTER 第 141 号
(vol. 37 no. 2)

2025 年 7 月 31 日発行

発行：日本ポピュラー音楽学会 (JASPM)

会長 南田勝也

理事 日高良祐・増田聡・永井純一
永富真梨・大瀧徹・太田健二
輪島裕介・安田昌弘

学会事務局：

〒606-0016

京都府京都市左京区岩倉木野町 137

京都精華大学メディア表現学部

安田昌弘研究室内

jimu@jaspm.jp (事務一般)

jaspmkk@gmail.com (ニューズレター関係)

<http://www.jaspm.jp>

振替：

00160-3-412057 日本ポピュラー音楽学会

編集：増田聡・大瀧徹